

映像のなかの世界、世界のなかの映像 —同時代感覚を取り戻すために(2)—

黒田 俊郎

Here I stand, I can do no other.
Martin Luther King

はじめに

この共同研究は、旧来の教養教育の枠組みを超えた新たな教養教育の再構築を目指したものであった。共同研究中間報告書所収の拙稿で、筆者は、高島道敏、ノーマ・フィールドラの仕事に依拠し、筆者が取り組んできた授業実践の内容も踏まえながら、政治学の立場から、現在求められている「教養」を、世界の人々から発せられたメッセージを「受容」し、それに基づいて世界の構造を歴史的かつ批判的に考察したうえで、世界を長期的な視野に立ってより望ましい形で構想し直し、その構想をメッセージとして世界の人々に向けて発信する同時代感覚に依拠した一連の知的作業として理解すべきことを論じた(黒田、2007)。本報告書最後の「展望」部分で、柳町裕子は、それを「世界について知り、世界と自分の関わりを知り、それについて考え、そして自分の考えを、自分自身を表現することと定義している(柳町、2008)。むろんその作業の核心には、「同時代感覚の回復」という主題がある。柳町論文末尾には、共同研究の次のステップとしての「連続授業案」が掲載されている。その連続授業において、筆者は、第1部全4回の授業を担当する予定となっているので、テーマと講義概要を下記転載しておくことにしよう(柳町、2008)。

第1部テーマ：世界にリアリティを感じない私たち～同時代感覚を取り戻すために～

要旨：私たちは、テレビやインターネットの情報によって、また歴史や現代社会の教科書によって、世界各地で起こった、そして、今まさに起こっている紛争、戦争、貧困について「知っている」はずである。しかし、自分と直接的な関わりをもった同時代の現実としてそれらを本当に「知っている」のだろうか？真実を報道すること、写真や映像で何かを伝えること、それらの行為に自覚的な報道者、表現者たちが提出する映像資料を見ながら、世界を知り、世界と自分たちの関わりについて考え直す機会をもつ。

筆者の怠慢と諸般の事情で、共同研究中間報告書所収の拙稿で示した論文の執筆が不可能となった今、以下、本稿では、これまでに筆者が行ってきた授業実践から、さらにもうひとつこの連続授業のたたき台となるであろうものを紹介し、共同研究の今後の作業のなかで、筆者になにができるのか、その一端を明らかにしておこうと思う。

1. 授業例＝新潟大学2007年度「国際関係論」

授業例として取り上げるのは、新潟大学法学部で2007年度後期に開講した「国際関係論」である¹⁾。この授業は、冷戦終結後の世界政治の動向をフォローしながら、21世紀の戦争と平和の問題を考えることを通して、現代国際関係を理解するさいに必要な、歴史感覚、現場感覚、基本概念を受講生に習得してもらうことを主たる授業目標とした初学者向けの国際関係の入門・基礎講座であった。実際の歴史の流れのなかで、国際関係にかかわる具体的で重要な問題を多角的に検討することによって、受講生の国際関係にたいする関心を高め、以後の学習の動機づけとしたいと考えていた。

授業の最初に、1989年から2007年の時代概況を年表で一瞥したのは(本稿巻末の資料参照)、ちょうど学生たちの個人史とほぼ重なる、冷戦後15年あまりの世界と日本の動きを実感してほしかったからである。続いて、ジョセフ・ナイの『国際紛争：理論と歴史』第6章から第9章に依拠しながら、冷戦後世界政治における紛争パターンを理解するための三つのポイントを講義した(ナイ、2007)²⁾。すなわち冷戦終結後、(1)国家間の大戦争は起こりそうもなく、(2)地域紛争は今後も発生し、(3)テロリズムの脅威は深刻化するであろう、というナイの三命題である。第1命題については、国際関係の諸理論についても必要最低限の解説はおこなうため、ナイの所説を解説した。ナイは、冷戦の終結は、なによりもまず米ソ二極体制の終焉を意味するものであり、国際的無政府

性(無政府的な主権国家システム)という国際関係の基層的な特徴を変えるものではなく、したがって国家間の大規模戦争の可能性が原理的になくなったわけではないが、以下の四つの要因によって、世界政治の複雑性が増大し、その可能性が小さくなったことは否定できないと主張している。①国際法と国際組織、②相互依存、③グローバリゼーション、④情報革命の四要因である。ただし三番目と四番目の要因、グローバリゼーションと情報革命については、大規模戦争(そして国際的テロリズム)の原因となる可能性が今後生じるかもしれないと述べているのであるが、この部分は、本稿の問題関心とはいささかずれるので、詳論はしない。むしろ以下では、授業でナイの第2命題および第3命題を学生たちに説明する際に用いた3本の映像資料を中心に議論を進めることにする。

2. 『戦場のフォトグラファー：ジェームズ・ナクトウェイの世界』

授業で使用した最初の映像資料は、2001年のスイス映画、クリスチャン・フレイ監督のドキュメンタリー映画『戦場のフォトグラファー：ジェームズ・ナクトウェイの世界』である³⁾。利用趣旨は、冷戦後世界政治における紛争パターンに関するナイの第2命題(地域紛争は今後も発生しそう)を検討するための素材を学生に提供するためであった。ナイの第1命題(国家間の大戦争は起こりそうもない)がかりに妥当性をもつ主張だとしても、冷戦後の世界は、けっして平和でも豊かでもないことを、学生たちに実感してもらうために使用した。映画の主人公、ナクトウェイは、米国生まれの世界的な報道カメラマンで、この映画に記録されているのは、1990年代、すなわち「冷戦後、9・11以前」の世界である。そこには、冷戦終結の余韻とともに21世紀の世界の予兆が秘められている。

授業では、地域紛争を「他者の苦痛へのまなざし」⁴⁾と「現場で働くロジック」の双方から見つめるという構図(表1参照)を採用し、その枠組みのなかで劇中のナクトウェイのこぼを紹介し、その意味を考えた。

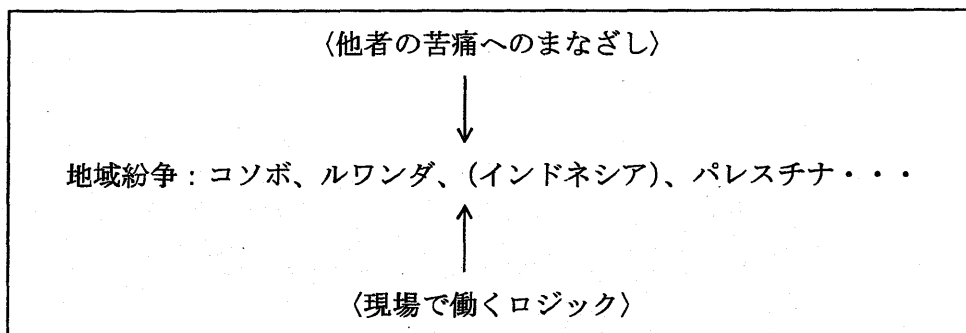


表1：地域紛争を考える視座

以下、少し長くなるがナクトウェイの発言を列記する。

- A. これらの写真が撮れたのは、カメラを向けた人々から私が受け入れられたからだ。こういう瞬間を写真に撮るには、心の繋がりがなければならない。彼らが私を歓迎してくれ、私を例外として許してくれたからだ。彼らは理解してる。カメラを持った外国人が自分たちの声を世界に知らせてくれることを。それ以外に外の世界に声を届ける方法がないと。彼らは自分たちが不当な犠牲者だと理解している。不必要な暴力の犠牲者だと。そして私が彼らの写真を撮れば、外の世界へのアピールとなり、皆に事態を知ってもらえる。
- B. 最も理解できなかったのは、ルワンダで目撃した状況だ。あそこで何人死んだか、本当の数は分からない。50万から100万人か。それも原始的な武器で。棍棒や石や山刀などだが、直接殺された。私は虐殺の場に何カ所か行って見たが、なぜこんなことが可能かまったく理解できなかった。なにがこの恐怖と憎しみを生みだしたか、それは私の理解を超えていた。とてもつらい体験だった。フツ族の軍隊が内戦に敗れた際、フツ族の人々は隣国に逃げた。タンザニヤやザイールに。ゴマの難民キャンプでコレラが流行し、瞬く間にキャンプ中に拡がったんだ。そのとき私は、難民の写真を撮りながら、彼らの多くが数週間前に目撃した虐殺の当事者だと気づいた。ま

ナクトウェイの現場からの発言とナイのアカデミシャンとしての議論を重ね合わせるとき、地域紛争をめぐる人道的軍事介入の是非という、90年代、ソマリア、ユーゴ、ルワンダなどを対象として世界中で真剣に議論された問題が今日でもなお論ずるに値するテーマとして再浮上してくると最後に強調し、ナクトウェイははたして「人道的介入」という名の軍事力行使を認めるだろうか、学生たちにイラク戦争とは別の意味での「正義の戦争」の可能性に目を向けるよう促したのである⁶⁾。

3. 『0911カメラはビルの中にいた』

『アブグレイブで何が起きていたのか：調査報告・イラク収容所虐待事件』

授業で使用した二番目と三番目の映像資料は、いずれもテレビで放映されたドキュメンタリー作品で、『0911カメラはビルの中にいた』は2002年10月6日放映（NNNドキュメント'02）、『アブグレイブで何が起きていたのか：調査報告・イラク収容所虐待事件』は2005年11月12日放映（NHKBSドキュメンタリー）である。ともにテロリズムの脅威の深刻化というナイの第3命題関連の映像資料である。

前者は、世界貿易センタービルを管轄とするニューヨーク消防署（FDNY）第7分署の消防士たち（ジョセフ・ファイファー隊長、見習いトニー〔アントニウス・ベネタス〕など）の行動を追ったフランス人カメラマン兄弟（ギデオン&ジュール・ノード）のドキュメンタリー映像で、2001年9月11日の出来事（表2参照）が消防士たちの視線から記録されている。

08:45	ニューヨークの世界貿易センタービル北棟に、アメリカン航空11便(92人-邦人1人-搭乗)が激突
09:05	同ビル南棟にユナイテッド航空175便(65人搭乗)が激突
09:39	アメリカン航空77便(64人搭乗)がワシントン郊外の国防総省に激突
10:00	世界貿易センタービル南棟が倒壊
10:10	ユナイテッド航空93便(45人搭乗-邦人1人-)がペンシルベニア州で墜落
10:30	世界貿易センタービル北棟も倒壊
20:30	ブッシュ大統領が「数千名の命が一瞬のうちに失われた」とテレビ演説。「テロリストたちと彼らを匿う勢力とを区別しない」と宣言

◇死者・行方不明者数(乗っ取り犯はふくまず)

世界貿易センター：死者・行方不明2801(アメリカン航空11便およびユナイテッド航空175便の乗員乗客をふくむ)

表2：2001年9月11日（ニューヨーク）

授業では、ドキュメンタリー上映後、まずナイの前掲書所収の年表「アラブ＝イスラエル紛争」に依拠しながら、さらに古代ヘブライ王国のいにしえにまでさかのぼり、聖都エルサレム、イスラーム諸王朝、十字軍、ルネサンスなどにも言及しつつ、9・11を中東地域の歴史のなかに位置づけ、その歴史的背景と経緯をできるかぎり正確に学生に伝えようと試みた⁷⁾。そして時間の制約で映像資料を活用することはできなかったが、モハメド・アタをはじめとするテロ容疑者たちのプロフィールとその事件までの行動についても解説した。

他方、後者『アブグレイブで何が起きていたのか』は、イラクの首都バグダッドから西へ約32km、フセイン政権下の政治犯収容所であり、イラク戦争後は、米軍の戦争捕虜収容所となった刑務所で起こった米兵による捕虜虐待事件の真相に迫った力作である。授業では、ドキュメンタリー上映後、9・11後の世界の主な戦争（アフガニスタン戦争、イラク戦争、ダルフル紛争等）とテロ⁸⁾を一瞥したのち、なぜアブグレイブで組織的虐待が起きたのかを、国連本部爆破テロ（バグダッド、2003.8.19、デメロ特別代表ら24人死亡）との関連（イラク戦後における早急な治安回復のための「アルカイダメンバー」に対する情報収集目的）と対テロ戦争(war on terrorism)との関連（対テロ戦争における情報収集には手段を選ばず、テロリストは「捕虜≠人間」ではないし、民間人の誤認拘束も必

要悪)で考察した⁹⁾。とりわけ対テロ戦争関連は、前田幸男の論考(前田、2007)に基づき比較的詳細に論じた(表3参照)。

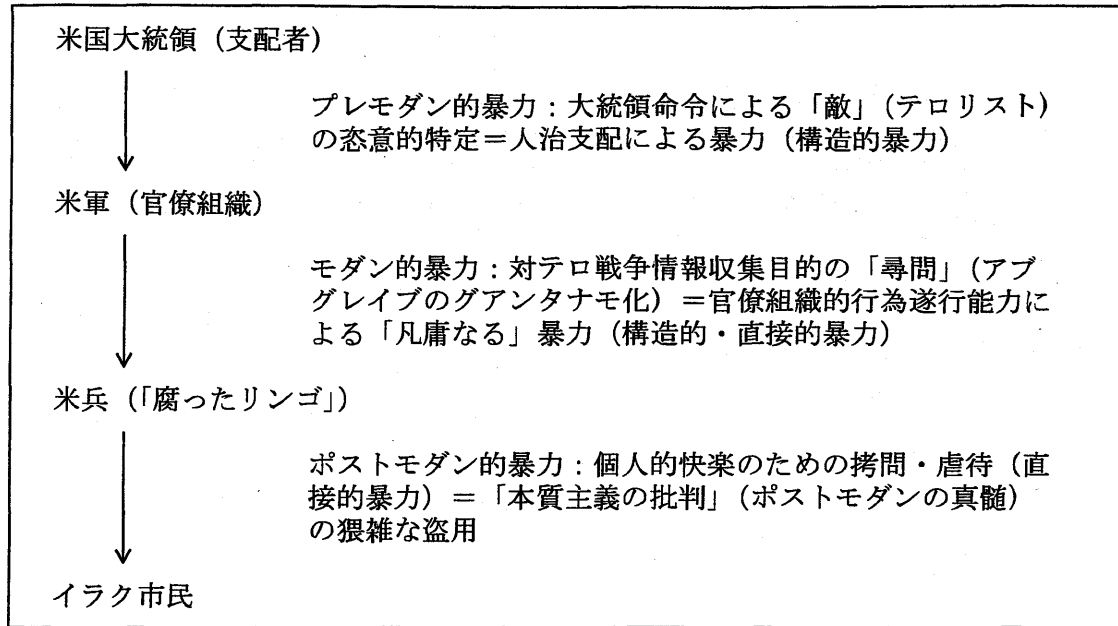


表3：アブグレイブ刑務所における拷問の構造(「拷問」写真の流失：2004.4)

表3は、9割が無実だったというイラク市民に対する米兵による拷問の構造を概念的に示したものである。イラク市民に直接拷問・虐待を行ったのは、男女米兵(と民間軍事関連会社[PMCs]の要員)である。彼ら、彼女らは、オリエンタリズムに基づき「性」と「犬」を媒介とした拷問を行い、その意味で彼らの拷問は文化的暴力でもあった。オリエンタリズムとは、むろんエドワード・サイードの用語であり、「イラク市民＝アラブ人＝イスラム教徒＝テロリスト」という等式を自明視し、主人(西洋)が奴隷(非西洋)を支配するのは「自然」であるとする支配イデオロギーである。

性的拷問は、異性性(男女)に基づく拷問(男性に女性の下着を被せる、米軍女性兵士の眼前での自慰の強要、強姦)と同性性(男男)に基づく拷問(男性全員の裸体の強制的露出[同性の前で自分の裸を露出する]、裸体の男性による人間ピラミッド[同性との強制的な接触])に区分され、犬による拷問の例としては、二人の軍用犬訓練士が軍用犬を使ってどちらの方が早く捕虜を強制的に排尿・排便させることができるかを競う事例(カフカ的世界の現出：ヨーゼフ・Kの悪夢[『審判』]、グレーゴル・ザムザの悲哀[『変身』])を挙げることができるが、いずれも男女の区分や人間と犬の区分を「ずらし」「転倒する」とう点で、ポストモダンの本質主義批判の猥雑な盗用である。

拷問・虐待の直接の実施者たる米兵を構造的に取り囲んでいる拷問のより上位の主体は、官僚機構としての米軍それ自体である。官僚組織としての米軍が行使するモダンで凡庸な暴力については、前田のつぎの一文を引用しておくことにしよう(前田、2007:111)。

収容所での拷問がルーティン化していると考え、すでに組織人が道徳的要素を忘却するプロセスが入り込んでいるのである。この点、ジークムント・バウマンは、ホロコーストを論ずる際にハーバート・ケルマンを引用しながら残虐行為に対する道徳的抵抗感を浸食する要素を三つ挙げている。すなわち(1)「暴力が(法的権限を持つ部署からの公式な命令により)認められていること」、(2)「行為が(規則的実行と正確な役割分担を通じて)日常化されていること」、(3)「暴力の被害者が(思想的定義と洗脳によって)非人間化されること」の三つである。しかも、バウマンは大量殺戮が実際に起こる三つの条件を明示している。すなわち(1)「グランド・デザインはそれに正当性を付与する。」

(2)「国家官僚機構はそれを媒介する。」(3)「社会的麻痺はそれに(ゴーサイン)を送る」と。もはや明らかなのは、このホロコーストのトリアーデが米国による対テロ戦争の一環としての収容所での拷問にピッタリと一致するという点である。つまり、(1)対テロ戦争という大義(グランドデザ

イン)の下、暴力は正当化され、(2)イラクに展開する米軍やCIAなどの官僚国家組織の活動は日常化され、(3)9・11によってイスラム原理主義者が非人間化されることに対して、米国社会は完全に麻痺し、拷問発覚までこの問題に全く対処できなかったのである。

そして最後に米軍という国家官僚機構の上に支配者としての米国大統領が君臨統治するのである。9・11直後、アフガニスタン戦争の最中、ブッシュ大統領によって発せられた大統領命令第1号(2001.11.13)によって、米国大統領によってテロリストとみなされた人物は、国際法上の捕虜でも、国内法上の犯罪容疑者でもなくなってしまったのである。すなわち「テロリストと目されたり、またテロ支援に関わっていると目されると、大統領の判断によって、当該人間はいかなる司法的権利も認められなくなる」(前田、2007:112-113)のである。また以上みた「拷問の構造」は、ただアブグレイブのみではなく、全世界に散在する米軍やCIAの(公開・秘密の)収容所に一貫して存在するものであることを忘れてはならないであろう。このことを強調して、新潟大学2007年度「国際関係論」の授業は閉じられたのである。

4. 学生たちの感想

以下、最後に授業を受講した学生たちの感想をいくつか紹介しておきたい。学生の感想をみるかぎり、筆者が意図した授業目標のかなりの部分は(むろん完全なものからはほど遠いが)満たされているように思う。受講してくれた学生たちに感謝を捧げて、本稿のむすびとする。

A. 私が国際関係論の授業をとったのは、内戦などよりもむしろ9・11の話に惹かれたためでした。リアルタイムで映像を見ていたので、関心が強かったのです。ですが実際に授業を受けて、映像資料を見て、テロはもちろんですが、地域紛争こそ一番に考えなければならないものだと痛感しました。ジェームズ・ナクトウエイのビデオを見て、私は黒柳徹子さんの『トットちゃんとトットちゃんたち』という本を思い出しました。この本は彼女がユニセフの親善大使となってタンザニアやバングラデシュ、ルワンダなど多くの国を訪問して出会った子供たちについて書かれたもので、内戦によって家や家族を失った子供たちの様子も写真つきで載せられています。この写真の中にはナクトウエイが撮影していたような、餓えに苦しむ人やたくさんの骸骨が写されたものもあります。初めてこの本を読んだとき私は小学生くらいでしたから、大変ショックを受けました。ビデオでもありましたが、外見だけでは違いなどわからないような人たちが、民族間で何か憎みあって殺しあう、ルワンダのフツ族ツチ族は、近所の人に殺されるとか、混血の子供が兄弟のうち半分だけ殺されるとかということがあったそうですが、とても残酷だと思いました。たぶん、犬と猫が威嚇しあうのと同じことなのだと思います。これが犬とライオンだったら喧嘩にすらならない。わずかな差異が紛争を起し続けていて、この差異が埋まることは決してないと思います。地球には肌の色や思想がまったく違う人がいて、裏を見れば外見上ほんの少し、または外見は同じだけど思想だけがほんの少し、違う人がいるのは当然です。この「ほんの少し」が疑心暗鬼を生み、紛争につながっていくのだとしたら、人間が生きている限り、争いが止むことはないでしょう。私たちは、ナクトウエイの写真を見て、「戦争は悲惨だ、やめなければならない」と思います。でも私自身、そうは思ってもどう動けばいいのかはわかりません。線路際で生活する家族を見て、少ない給付金の中から寄付をしようと思ったという方がいましたが、私もユニセフなどに寄付をして難民のために使ってもらおうとかしか思い浮かばないのです。人の手で起こされている争いは、そう簡単に人の手で止められるとは思いません。それでも、電車すれすれの土地で生活している家族だとか、遺体に花を投げる子供だとか、死んだままの体勢で野ざらしになっている人たちを見ると、私たちにも何かしなくてはならないと考えます。紛争が止められないのであれば、せめてこれ以上起こさないようにするために子供たちを教育していくとか。残りの授業で、それを考えていきたいと思います。

B. なぜ戦場カメラマンが自分の身の危険を冒してまで現場に向かい映像や写真を取るのかと思っていました。そして、被写体となる人々も自分の悲惨な状態などを撮られるのは嫌ではないのかと思っていました。きっとこれは平和ボケしている私たちのような人間が思うことなのだとすることに気づかされました。現場に赴き、現実を伝える、事実はこのなのだと言え皆の注意を喚起しなくてはいけない。私たちのような人間に現実を見せ同じ人間がどれだけ悲惨なことをし、一方でされている人間がいることを突きつけるためなのだとすることに気づかされました。被写体になった人々も、写真に収められることで世界へのメッセージを身をもって発信しているのだということに気づかされました。地球上のどこ

かで起きている惨劇を写真やメディアを通し私たちにメッセージを発信することで問題と向き合わせることに繋がり、国際関係を学ぶということはそういうことに真正面から向き合い考察していくことであるのだなと思いました。

C. ナクトウェイの DVD より、私は2つの考えを学んだ。1つは、『自分の行動が他者から受け入れられて、初めて自分が受け入れられる』というナクトウェイの言葉。日々自分の感情に左右され行動している自分に、私は自信がない。人にも受け入れられている気がしない。「なぜ、私は軽んじられるのか？」毎日の疑問であった。大学で知識・情報を拡大させることは、さらに深刻に自分を追い詰めるのではと思った。だけど、私はこの授業で学ぶうち、自分が世界中の困難な状況に目を向けるときのまなざしは、まさしくソントグの言う「同情」であることに気がついた。それに気づいたと同時に、自分を受け入れる方法の1つをナクトウェイの言葉から見つけた。自分で書いていて、なんだか宗教的な心理のようだが、決してそうではない！まだ、それを人に示せるほどの力量はない。残念ながら。9・11ドキュメンタリーを観た。今はアブグレイブのドキュメンタリーも見終わっている。2週続けて涙が出るとともに、吐き気がした。9・11に関して、私が一番共感したのはビンラディンの言葉である。これを称賛したい自分と、人を殺してはいけないと言う気持ちの自分がある。しかし、後者は世間体であろう。アブグレイブをみてその気持ちは強まった。私は何をすればいいのか？万人の疑問であってもそれを繰り返したい。どうか、この授業が終わり、私がある希望を見出し努力していますように。

D. ナクトウェイのDVDは衝撃的だった。怖かった。爆弾も怖かったが、それより人間が怖かった。アフリカの飢えている人々の体は肉体というより骨だった。あそこまで人間は瘦せられるのか。食料のもらえる難民キャンプにもかかわらず、皆が骨のまま動いていた。恐ろしい光景だと思った。口が裂けている男の人の横顔は、男の人は普通の顔をしていたが、見ていられなかった。きっと、あの人は、私のような人間に会うたびにひどく歪んだ顔をされるのだろう。そう思うと胸が軋んだ。戦場で写真を撮ることは大切だが、その写真に収められるのはたいてい他人の不幸だ。DVDにもあったように、人が殺されかけ、助けを求めているのに「俺はカメラマンだから」といってその人を見殺しにする人間には、やるせない気持ちになる。彼は現場にいてもなおカメラのこっち側にいるのである。それはきっと、それだけで幸福なことなのだろう。安全な場所でDVDを見ることができのだから、私もきっと幸福な人間なのだろう。しかし、ナクトウェイは違う。ナクトウェイはあっち側の人間だと感じた。カメラを構えていても、いなくても、彼はカメラの向こう側にいて、向こう側をありのまま写している。そう感じた。だから彼の写真は、こっち側の私の心にまで強く訴えかけてくるのかもしれない。私たちは彼の写真に、この現実はどう答えればいいのか。今も考えている。9・11のドキュメンタリーは前に一部分だけ見たことがあったが、全部を見るのは初めてだった。「人間が雨みたいに降ってくる」という言葉と、人が飛び降りる、どーん、という音が以前も今回も一番印象に残っている。血の雨を浴びた消防士の、呆然とした顔も忘れられない。映像を見ていて、私もショックだった。あのときあの場所にいた人々はその数千倍以上ショックだったと思う。アメリカ本土の中心部が直接攻撃されるのは初めてのことなのだ、と思い出した。被害者としてのアメリカ、という図式は、パールハーバー以来かもしれない。今までは世界のリーダーとして振舞う余裕のあったアメリカが、その余裕を失くしたのは、攻撃される痛みと恐怖に慣れていなかったから、というのものもあるのかもしれない。アブグレイブのドキュメンタリーを見て思ったのは、アメリカはアメリカの尺度でテロを見ているということだ。だからやるべきことがいちいち逆効果なのである。アメリカ人には、イスラム社会は皆敵に見えるのだろう。だから何の罪もない市民ひとりに対しても脅え、必要以上の暴力を市民に与える。市民は暴力を受け、アメリカを憎む。そして自爆テロが起こる。アメリカは市民を警戒し、いっそうの暴力を与える。そんな悪循環に陥っているような印象を受けた。9・11前後の動きについては、年明けの授業でじっくり考えていきたい。最後に、ユーゴスラビア紛争の講義が大変興味深かった。もう何時間かこの紛争で講義をしてほしい位興味深かった。社会主義の名の下に微妙なバランスを保っていた連邦国家が、チトーの死後少しずつその均衡を崩していく様、国の動き、人々の心理。ひとつひとつ丁寧に解説してもらえたので、紛争の背景がよく分かった。ユーゴ時代は他民族、他宗教であっても仲良く入り混じって暮らしていたボスニア・ヘルツェゴビナの人々が、他地域の紛争の中で身を小さくしている様子を想像すると切なくなる。結果として民族ごとに住み分けることになり、共存の時代は終わってしまった。他民族同士、他宗教同士、入り混じって仲良く暮らすということはもうできないのだろうか。かなしい結末で、やるせない。平和を築くこと、共存を維持することは本当に難しいことだと感じた。もう何時間か講義を受けたいと本当に思う。現在の旧ユーゴについても勉強したい。この紛争に関しては、文献にあたるなどして個人的に理解を深めていきたい。

註

- 1) この授業内容の一部は、2007年度前期に筆者が行った二つの授業、すなわち新潟国際情報大学「地球社会と人権」と県立新潟女子短期大学「現代国際政治論」の内容と重なる部分がある。より正確に述べると、この二つの授業、とりわけ後者の授業経験に基づきながら、その内容を改訂をしたものである。
- 2) 周知のように、ナイのこの教科書は、第1次世界大戦から冷戦までを扱った第1章から第5章までと、冷戦後の世界政治を対象とした第6章から第9章までとは、その論述の仕方が大きく異なっている。すなわち前者に存在した分析枠組み(①リアリズム、リベラリズム、コンストラクティヴィズムという三つの国際関係理論を駆使し、②因果関係の三つのレベル[国際関係、国内政治、指導者の個人的資質]を設定し、③反実仮想を活用する)が後者においては、融解ないし消失しているのである。
- 3) 『戦場のフォトグラファー』チャプター=1.孤高のフォトグラファー；2.戦火の残像；3.母親の涙；4.1980年～覚醒；5.目前の現実；6.今、戦場で・・・；7.理解を超えた体験；8.ジャカルタ～ある家族の記録；9.ナクトウエイの選択；10.死との接点；11.寡黙な語り部；12.視座～ジャーナリストとして；13.知識と本能；14.効果的虐殺；15.写真展；16.撮り続ける理由；17.信念、そして希望；18.エンドクレジット。
- 4) 「他者の苦痛へのまなざし」とは、述べるまでもなくスーザン・ソントグのことばである(ソントグ、2003)。同書から関連する箇所を一節だけ引用しておきたい。「感情を鈍化させるのは、受動性である。無感動あるいは道徳的・感情的知覚麻痺と形容される状態は感情に満ちていて、その感情は怒りと挫折である。だがどのような感情が望ましいかを考える場合、同情を選ぶのは単純すぎる。他者が遭遇し、映像によって確認される苦しみへの想像上の接近は、遠隔の地で苦しむ者(テレビ画面でクローズアップされる)と特権的な視聴者とのつながりを示唆するが、それはけっして本物ではないし、権力とわれわれとの真の関係を今一度ぼやかしてしまうだけである。同情を感じるかぎりにおいて、われわれは苦しみを引きおこしたものの共犯者ではないと感じる。われわれの同情は、われわれの無力と同時に、われわれの無罪を主張する。そのかぎりにおいて、それは(われわれの善意にもかかわらず)たとえ当然ではあっても無責任な反応である。戦争や殺人の政治学にとりまかれている人々に同情するかわりに、彼らの苦しみが存在するその同じ地図の上にわれわれの特権が存在し、或る人々の富が他の人々の貧困を意味しているように、われわれの特権が彼らの苦しみに連関しているのかもしれないーわれわれが想像したくないような仕方ですーという洞察こそが課題であり、心をかき乱す苦痛の映像はそのための導火線にすぎない」(ソントグ、2003:101-102)。
- 5) 「主権と非介入こそが、無政府的な世界システムに秩序をもたらす2つの原則なのである。それと同時に、非介入は正義とも関連している。国民国家というものは、人々の共同体、一定の国家としての領域内で共通の生活を発展させる権利を正当に保持している人々の共同体でもある。外部の人々は、彼らの主権と領土保全を尊重しなければならない。」(ナイ、2007:192)。
- 6) 授業では、このあと、地域紛争の発生メカニズムを学生により具体的に知ってもらう目的で、参考としてユーゴ内戦について講義した。時間の制約で映像資料を使うことはできなかったが、かなり詳細なレジュメを用意し、ユーゴ内戦の背景にある政治的危機(ポスト・チトー[1980 死去]の権力闘争)、経済的危機(自主管理社会主義の破綻：石油ショック[1974/79]への不応とユーゴ内部における南北問題)、社会・文化的危機(アイデンティティの変容：共産主義→民族主義)を解説し、この三重の危機が、歴史的記憶(第二次大戦におけるセルビア人とクロアチア人の対立等)の政治的利用(相互理解から相互憎悪へ)によって軍事的危機に転化し内戦が勃発するプロセスを、コソボ①(1989)→スロヴェニア(1991)→クロアチア(1991-95)→ボスニア・ヘルツェゴビナ(1992-95)→コソボ②(1998-99)と時系列順に検討した。またEC/EU、国連、米国等、国際社会の対応とユーゴ内戦の国際政治上の意味についても簡潔に論じた。なお、このユーゴ内戦を1999年度の「現代ナショナリズム論」(県立新潟女子短期大学)の講義メモに基づきながら、各種映像資料と最新文献によって再論することが本稿の当初の執筆意図であったが果たせなかった。他日を期したい。
- 7) 9.11の背景に中東紛争があることは、述べるまでもないと思うが、例えば2001年10月7日、カタールの衛星テレビ局アルジャジーラは、米英軍によるアフガニスタン攻撃の開始約2時間後、声明を発表するビンラディン氏の映像を放映した。その発言要旨をつぎの通り。「巨大なビルが破壊され、米国は恐怖におののいている。米国民が味わっている恐怖は、これまで我々が味わってきたものと同じだ。我々ムスリムは80年以上、人間性と尊厳を踏みにじられ、血を流してきた。神は米国を破壊したムスリムの先兵たちを祝福し、彼らを天国に招いた。今もイラクで罪のない子供たちが殺されているのに、それを糾弾する声は聞かれない。イスラエルの戦車がパレスチナで破壊行為を続けているのに、だれもそれを直視しようとしぬ。なのに剣が米国に振り下ろされると、偽善者たちは悲しみを表明する。米国はテロに立ち向かうとうそをつき続けている。(原爆を投下された)日本をはじめ、世界中で何十万人が殺されても、米国はこれを犯罪とは呼ばない。(98年に米国大使館連続爆破のあった)ナイロビとダルエスサラームで米国人が殺されると、アフガニスタ

ンなどに爆弾を落とす。世界は今、信仰をもつ者と、異教徒に分かれようとしている。すべてのムスリムは信仰を守るため、立ち上がらなければならない。預言者ムハンマドの地、アラビア半島から悪魔を追放する風が吹いている。米国民よ、私は神に誓う。パレスチナの地に平和が訪れない限り、異教徒の軍隊がムハンマドの地から出て行かない限り、米国に平和は訪れない。」なお9・11の時、ナクトウエイはNYにいた。「グラウンドゼロの現場に立ち、私は怒りと慟哭、悲しみと憤りを感じたが、それは自分がこれまで訪れた、どの戦場にもあるものだった。サイレンがけたたましく鳴り響き、都市の機能が完全に麻痺した街を歩いて帰宅した。部屋に戻るとガスも電気も止まっていた。私はろうそくに灯をつけた。それまで何十回も戦場でそうしてきたのと同じように。ただ違うのは、ここが自分の家だということだけだった。それまで私はレバノン、パレスチナ、イラクなどさまざまなイスラム諸国の戦争を20年以上にわたり撮影していたが、ずっと私は別々の事柄を追っているのだと思っていた。しかしそれが9・11の瞬間、グラウンドゼロの現場でひとつに結晶化した。イスラム社会は、ずっと以前から悲鳴をあげていた。それを私は知っていた。」(art blog void chicken DAYS: ジェームズ・ナクトウエイ講演会[2006.4.29]: <http://voidchicke.exblog.jp/4533648/>) ちなみに、年表解説のポイントは以下の通りである。1. 悪いのはイギリスだ! (1915年～17年) 2. イスラエル建国 (1948年) 3. イスラーム原理主義の勃興 (1967年) 4. イスラーム原理主義の高揚と反米感情 (1979年) 5. 主敵アメリカ! (1991年) 6. 中東和平の光と影 (1993年と2000年)。

- 8) 連続爆破テロ (インドネシア・バリ島: 02年10月)、劇場占拠テロ (ロシア・モスクワ: 02年10月)、連続爆破テロ (モロッコ・カサブランカ: 03年5月)、国連本部爆破テロ (イラク・バクダッド: 03年8月)、英総領事館爆破テロ (トルコ・イスタンブール: 03年11月)、列車爆破テロ (スペイン・マドリード: 04年3月)、同時爆破テロ (イラク・バクダッド&カルバラ: 04年3月)、学校占拠テロ (ロシア・北オセチア: 04年9月)、同時多発テロ (英国ロンドン: 05年7月)、連続爆破テロ (エジプト・シャルムエルシェイク: 05年7月)、連続爆破テロ (インドネシア・バリ島: 05年10月)、列車爆破テロ (インド・ムンバイ: 06年7月)
- 9) テロリストは「捕虜≠人間」ではないし、民間人の誤認拘束も必要悪という認識は、9・11直後から、アフガニスタン → グアンタナモ → アルグレイブと受け継がれてきたものである。「アフガニスタン戦争終結後の2002年1月20日、ストロー英外相は、キューバのグアンタナモ米海軍基地で拘束されているアルカイダのメンバーの処遇をめぐって『国際法に従い、人道的に扱われるべきだ』と危惧を表明した。2月2日付けのニューヨーク・タイムズ紙には、米国の医師がつくる人権団体メンバーによるアフガニスタン現地調査報告『忘れられた戦争捕虜』が掲載された。筆者は大学教授の医師ら二人で、アフガニスタン北部のシェバルガン刑務所に1月20日、人権団体として初めて立ち入りを許可されたという。同報告によると、シェバルガン刑務所ではタリバーン兵が非人間的な待遇を受けており、多数の死亡者が発生していた。同刑務所の収容者数は3500人に及び、20人収容の部屋に100人以上が押し込まれ、千人当たりのトイレ数は8から10、体や手足を洗う設備は屋外の泥の中、食事・医療が不適切、などと報告された。こんな状況の中で、2月7日、ブッシュ大統領は、アフガニスタンで捕らえたタリバーン兵に捕虜の待遇を定めたジュネーブ条約を適用することを決定した。ただし条約を適用しても捕虜とは認めないとの立場であった。アルカイダのメンバーについては、同条約は適用されないと主張は堅持した。フライシャー大統領報道官は、捕虜として認められる国際法上の条件として、①軍の組織階級への所属、②軍服などの着用、③明確に分かる形で武器を携行、④戦争の法と慣習に従った軍事行動、の4項目を挙げ、タリバーン兵は、一般市民と見分けがつかない恰好でアルカイダのテロを支援していたとして、捕虜の資格を満たしていないという米政府の解釈を示したのである。」(黒田、2006)

参考文献

- 黒田俊郎、2006、「2001年9月11日：私たちはなにをなすべきだったのか」『法学新報』(中央大学法学会) Vol.112, Nos.7,8.
- ――、2007、「同時代感覚を取り戻すために―共同研究参画覚書―」県立新潟女子短期大学 2006年度共同研究『教養教育の戦略的再構築―メディア・人間・世界―中間報告』教養教育の戦略的再構築研究会。
- 前田幸男、2007、「アブグレイブ刑務所での拷問がはらむ複合的問題を可視化する：『六重の暴力』と反拷問のための『等価性の連鎖』に向けて」『情況』2007年5月・6月号。
- 柳町裕子、2008、「世界と出会う・自分と出会う」県立新潟女子短期大学 2007年度共同研究『教養教育の戦略的再構築―メディア・人間・世界―』教養教育の戦略的再構築研究会。

ソントグ、スーザン、2003、『他者の苦痛へのまなざし』(北篠文緒訳) みずす書房。

ナイ、ジョセフ・S, Jr., 2007、『国際紛争：理論と歴史[原書第6版]』(田中明彦、村田晃嗣訳) 有斐閣。

資料

時代概況：1989～2007

世界	日本
<p>1989</p> <p>1月 米ブッシュ（父）政権発足</p> <p>2月 ソ連、アフガニスタン撤退</p> <p>6月 天安門事件（第2次）</p> <p>7月 フランス革命200年祭（パリ）</p> <p>11月 ベルリンの壁崩壊(9)</p> <p>12月 米ソ首脳、冷戦終結を宣言（マルタ島）</p> <p>1990</p> <p>2月 ネルソン・マンデラ釈放（南ア）</p> <p>8月 イラク、クウェート侵攻(2)</p> <p>10月 ドイツ統一</p> <p>1991</p> <p>1月 湾岸戦争（～2月）</p> <p>6月 ・ユーゴ内戦（～95年12月）</p> <p>・南ア、アパルトヘイト廃止</p> <p>7月 ワルシャワ条約機構解体</p> <p>9月 南北朝鮮、国連に同時加盟</p> <p>12月 ソ連解体</p> <p>1992</p> <p>3月 国連カンボジア暫定行政機構発足</p> <p>6月 地球環境サミット（リオデジャネイロ）</p> <p>1993</p> <p>1月 ・チェコスロヴァキア解体</p> <p>・EC単一市場発足</p> <p>・米クリントン政権発足</p> <p>2月 NY世界貿易センタービル爆破事件</p> <p>9月 パレスチナ暫定自治協定調印</p> <p>11月 EU発足</p> <p>1994</p> <p>1月 北米自由貿易協定（NAFTA）</p> <p>4月 ルワンダ内戦激化（難民、虐殺）</p> <p>5月 英仏間でユーロトンネル開通</p> <p>1995</p> <p>1月 ・オーストリア、フィンランド、スウェーデン、EUに加盟（加盟国数：12→15）</p> <p>・世界貿易機構（WTO）発足</p> <p>4月 米オクラホマシティ連邦政府ビル爆破事件</p> <p>11月 イスラエルのラビン首相暗殺</p> <p>1996</p> <p>9月 国連、全面核実験禁止条約採択</p> <p>10月 金正日、北朝鮮トップ（朝鮮労働党総書記）に就任</p> <p>1997</p> <p>2月 鄧小平死去</p> <p>7月 ・香港返還</p> <p>・アジア通貨危機</p> <p>8月 ダイアナ元英皇太子妃、パリで交通事故死</p> <p>11月 エジプト・ルクソール神殿でイスラム過激派によるテロ事件</p> <p>8月 ケニア・ナイロビの米大使館テロ事件</p>	<p>1989</p> <p>1月 昭和天皇死去</p> <p>2月 手塚治虫死去</p> <p>6月 美空ひばり死去</p> <p>4月 消費税導入（3%）</p> <p>11月 日本労働組合総連合会発足</p> <p>1990</p> <p>4月 小中学校で日の丸掲揚、君が代斉唱が義務化</p> <p>1991</p> <p>2月 地価下落、バブル景気崩壊</p> <p>4月 海上自衛隊、ペルシア湾派遣</p> <p>1992</p> <p>4月 学校週5日制始まる</p> <p>6月 PKO協力法成立</p> <p>9月 カンボジアへPKO派遣</p> <p>1993</p> <p>5月 Jリーグ開幕</p> <p>8月 非自民連立政権成立（55年体制崩壊）</p> <p>1994</p> <p>3月 小選挙区比例代表並立制導入（衆議院）</p> <p>10月 大江健三郎、ノーベル文学賞受賞</p> <p>1995</p> <p>1月 阪神淡路大震災(17)</p> <p>3月 地下鉄サリン事件(20)</p> <p>8月 戦後50年の首相談話、アジア諸国に謝罪（村山談話）</p> <p>11月 WINDOWS 95発売</p> <p>1996</p> <p>8月 新潟県巻町で原発建設の是非を問う初の住民投票</p> <p>12月 ペルー日本大使公邸人質事件</p> <p>1997</p> <p>1月 ロシアタンカー、日本海で重油流出事故</p> <p>2月 神戸連続児童殺傷事件</p> <p>4月 消費税引き上げ（3%→5%）</p> <p>9月 日米防衛協力のための指針（新ガイドライン）決定</p> <p>12月 地球温暖化防止京都会議</p>

世界	日本
1998	1998
5月 ・印パ核危機 ・スハルト退陣	2月 長野冬季五輪 7月 和歌山カレー毒物殺人事件
1999	1999
1月 EU、ユーロ導入	8月 国旗・国家法成立
3月 ・コソボ戦争（～6月） ・ポーランド、チェコ、ハンガリー、NA TO加盟 ・対人地雷全面禁止条約発効	9月 茨城県東海村の動燃東海事業所で国 内初の臨界事故
4月 米コロンバイン高校銃乱射事件	
10月 世界人口、60億人を突破	
12月 マカオ返還	
2000	2000
6月 南北朝鮮首脳会談（平壤）	1月 新潟少女監禁事件発覚
7月 コンコルド、パリ郊外で墜落	12月 世田谷一家殺害事件
2001	2001
1月 米プッシュ（息子）政権発足	4月 小泉内閣発足
9月 米同時多発テロ(11)	6月 大阪教育大付属池田小児童殺傷事件
10月 アフガニスタン戦争（～12月）	8月 小泉首相、靖国神社参拝(13)
	11月 テロ対策特別措置法成立
2002	2002
1月 ユーロ、市場流通開始	6月 日韓共催W杯
4月 イスラエル軍、ジェニンの難民キャンプ 攻撃	9月 小泉首相訪朝。日朝平壤宣言に署名
5月 東ティモール独立	10月 拉致被害者5人帰国
7月 アフリカ連合（AU）発足	
10月 ・モスクワで劇場占拠事件 ・インドネシア・バリ島でテロ	
2003	2003
2月 スペースシャトル・コロンビア空中分解	6月 有事法制成立
3月 ・イラク戦争（～5月）	7月 イラク特別措置法成立
8月 イラク・バクダッドの国連本部でテロ	
2004	2004
3月 スペイン・マドリードで列車爆破テロ	1月 自衛隊、イラク派遣
4月 7東欧諸国加盟でNATO26カ国体制へ	5月 小泉首相訪朝。拉致被害者家族5人帰国
5月 東欧諸国など10カ国、EU加盟（加盟 国数：15→25）	6月 長崎県佐世保女児殺害事件
9月 ロシア北オセチア共和国ベスランで学校 占拠事件	7月 新潟、福島、福井で集中豪雨
11月 アラファトPLO議長死去	10月 新潟中越大地震(23)
12月 スマトラ島沖地震	
2005	2005
2月 京都議定書発効	4月 JR福知山線脱線事故
4月 ローマ法王ヨハネ・パウロ2世死去。ベ ネディクト16世就任	9月 衆議院選挙、自民党圧勝
7月 ロンドンで同時多発テロ。	10月 郵政民営化法案成立
10月 ・インドネシア・バリ島でテロ ・パキスタン北部で大地震 ・フランスで移民若者暴動	

世界	日本
<p>2006</p> <p>2月 ムハンマド風刺画事件 (欧州/中東)</p> <p>7月 ・北朝鮮、ミサイル発射実験</p> <p>8月 ロンドンで旅客機爆破テロ未遂事件</p> <p>10月 ・北朝鮮、核実験</p> <p>11月 ・米中間選挙、民主党圧勝、ラムズフェルド国防長官辞任</p> <ul style="list-style-type: none"> ・リトビネンコ事件 (←10月ポリトコフスカヤ記者暗殺) <p>12月 フセイン元イラク大統領、死刑執行</p>	<p>2006</p> <p>8月 小泉首相、靖国神社参拝(15)</p> <p>9月 安倍内閣発足</p> <p>12月 教育基本法改正、防衛庁「省」に昇格</p>
<p>2007</p> <p>1月 ・ブルガリアとルーマニア、EU加盟 (加盟国数: 25 → 27)。スロベニアでユーロ流通 (流通国: 12 → 13)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・国連事務総長に韓国の潘基文氏就任 ・米軍、イラクへ2万7千人増派 (3月、さらに4700人増派) ・イラク戦争、米兵死者3千人を越す <p>2月 イラク、バクダッドで自爆テロ、死亡130人以上、負傷300人以上</p> <p>3月 EU、ローマ条約調印50周年でベルリン宣言採択</p> <p>4月 ・米国バージニア工科大で銃乱射事件、32人死亡</p> <ul style="list-style-type: none"> ・米上院、イラク撤退法案可決、ブッシュ大統領拒否権発動(5/1) ・エリツィン前ロシア大統領死去 <p>5月 仏新大統領にニコラ・サルコジ氏当選</p> <p>6月 ・イスラム過激派ハマスがパレスチナ自治区ガザを武力制圧</p> <ul style="list-style-type: none"> ・英新首相にブラウン氏 <p>7月 ・イスラマバードの宗教施設でイスラム神学生が立てこもり、パキスタン政府、強行突入、50人以上が死亡</p> <ul style="list-style-type: none"> ・アフガニスタンでタリバーンが韓国人集団拉致、23人の人質のうち2人が殺害される <p>10月 ゴア前米副大統領にノーベル平和賞</p> <p>12月 ・韓国大統領選で李明博氏が当選</p> <ul style="list-style-type: none"> ・パキスタンのブット元首相暗殺 	<p>2007</p> <p>3月 能登半島で震度6の地震</p> <p>4月 ・長崎市長殺害事件</p> <ul style="list-style-type: none"> ・統一地方選挙、石原東京都知事三選 ・中国の温家宝首相来日。中国首相の訪日は6年半ぶり ・新潟市、政令指定都市になる <p>6月 改正イラク特別措置法成立</p> <p>7月 ・新潟県中越沖地震</p> <ul style="list-style-type: none"> ・参院選、自民、歴史的敗北 <p>9月 安部首相辞任、福田内閣発足</p> <p>12月 福田首相、初の訪中</p>